

## ウェールズ伝承における「アーサー王」

不破 有理

### “King Arthur” in Welsh tradition

Yuri FUWA

**要旨 Abstract** The figure of Arthur in the Welsh tradition is elusive: the name of Arthur appears variously in early Welsh poems such as “Englynion y Beddau,” “Pa ŵr yw’r porthor?” but only briefly. Other occurrences are found in Nennius and *Annales Cambriae*, where Arthur takes a role of a leader in battle (“dux bellorum”) leading twelve battles to victory for the Britons (in Nennius), and he falls together with Medrawt in the battle of Camlan (in *Annales Cambriae*). Nennius records two supernatural incidences concerning Arthur’s dog and his son, both of which attest to Arthur’s established reputation as a local hero and to his close association with Welsh legends. Yet these references are rather fragmentary, and more comprehensive account of Arthur’s character appears in *Culhwch ac Olwen*. This story offers a basic structure of Arthurian world, i.e., his court, his warriors and magician, his relatives, his equipments such as a sword and a shield, and the problems/adventure brought before Arthur to be solved. What is noticeable here is vagueness about the setting spatially as well as about the identification of Arthur as the “King”. The work does not call Arthur King; neither does it mention Arthur’s father and son, thus lacks the male genealogical evidence to establish Arthur in time. His court, Celli Wig

(which originally means grove and forest in Welsh) seems suggestive of Arthur's standing in pre-Geoffrey Welsh tradition. Arthur is an active pursuer of a task given him together with his men in band, but has no permanent place in actual world except somewhere in Welsh forest where Arthur is roaming around as a legendary folkloric hero.

円卓の騎士の物語として知られる「アーサー王物語」体系では、ウーサー・ペンドラゴンとイグレインを両親に Tintagel でアーサーは生を受け、宮廷を Camelot に構え、王妃には Guinevere を迎える。円卓の騎士としてはアーサーの甥である Gawain 兄弟、王妃と恋に陥る円卓第一の騎士 Lancelot、聖杯を成就する Galahad などの騎士たちが登場し、さまざまな冒険や戦いに繰り出し、最後はアーサーの甥であり息子であるモードレッドの裏切りによって王国が崩壊するという物語が展開する。この物語の大枠を提示したのが Geoffrey of Monmouth の *Historia Regum Britanniae* (1136/38 年頃) である。Geoffrey の影響は広範かつ甚大でのちのアーサー王伝説形成の中核となるのだが、Forum-on における本発表は Geoffrey 以前にどのようなアーサー像の原型が見出せるのか、ウェールズ伝承におけるアーサー像を Nennius の *Historia Brittonum*、*Annales Cambriae*、そして *Culhwch ac Olwen* を中心に追い求める試みである。

Nennius のアーサーはブリテン島に侵攻してきたサクソン人に対抗して戦う戦争の指導者 (dux bellorum) で、12 の戦いですべて勝利し、一時に 960 名の敵を斃す超人的な活躍をみせる戦士である。同じく Nennius にはアーサーの犬と息子にまつわる不思議な事象の記録が含まれ、それはウェールズに残る遺跡の謂れを語っているような印象を受ける。*Annales Cambriae* ではアーサーへ二度言及されているが、いずれも戦いにまつわる項目においてである。ひとつは Badon で戦いで十字架を担いだアーサーが勝利を収めたという叙述、そしてもうひとつは Medrawd とアーサーがともに Camlan で斃れたとの叙述である。Nennius と共通な点は、アーサーがキリスト教徒の戦士として戦いブリトン人が勝利したことである。いずれにせよ、後世の物語群とはかけ離れた断片的な記述に終始している。二つの資料の年代決定は難しいがおおよそ 9 世紀ごろの制作と考えられている。Nennius に遺跡の謂れと絡めてアーサーの名前が記録されていることは、すでに 9 世紀にはアーサーという人物が伝説化し遺跡の伝承として説明するに足る「知名度」を獲得する存在であったことを示しているといえるであろう。

上記の断片的な記述に比して物語のまとまりをもつ最古のアーサー王物語は

*Culhwch ac Olwen* である。アーサーを中心とした一団が、Culhwch が巨人 Ysbaddaden の娘 Olwen と結婚するために必要な品々を獲得するために、難問の数々を解決していく物語である。主な登場人物は、後のアーサー王物語でもアーサー王の古参として脇を固める Cai と Bedwyr、そのほか血縁者としては Culhwch とそのおば、母方の兄弟 Gorman mab Rica とその息子 Gwydre、門番の Glewlwyd Gafaelfawr、魔術師の Menw mab Teirgwaed などである。欠落している人物はアーサーの父親、そして息子たちの名前 (Nennius や “Pa ŵr yw'r porthor?” に挙げた息子たちへの言及もない) である。つまりアーサーの直系の家族構成は不詳である。とはいえ、のちの円卓の騎士として名を連ねる Cai や Bedwyr、魔術師の Merlin に類する存在を認めることはできる。

アーサーの空間的な活動範囲はウェールズとコーンウォールで、後の作品に見られるような汎ヨーロッパ的な広がりはない。キャメロットの代わりにアーサーが宮廷を置くのは Celli Wig で、そもそも「森」(Celli = grove, Gwig = forest) を意味する地が拠点であるのは示唆的である。宮廷 (Llys) を開いているものの、アーサーに対する呼称や肩書きに「王」(brenhin) は一度も用いられていない。アーサーの持ち物が紹介されているが、剣と槍と盾、小刀という武具は戦士に必要な持ち物であり、移動手段の船、着衣としての上着、狩猟に必要な犬、居場所としての広間であり、国王の象徴となるような王冠、玉座などへの言及がないのも注目に値する。アーサーはこの島の長の中の長であるとの表現は見られるが具体的な国王という地位とは結び付けられていないのである。

同様に、行動の動機についても曖昧である。物語の導入においも Culhwch の申し出自体が深刻な問題ではなく、まだ見たこともない娘に恋をしたので、結婚の望みを叶えてほしいという要望である。要望を受けたアーサーは Olwen の父親 Ysbaddaden の名前さえ知らぬと答えているように、アーサーが乗り出すのは雲をつかむような曖昧な探索である。後の騎士道ロマンスにおいても国王アーサーの元に問題解決の依頼に訪れる者がいるが、往々にして問題は比較的具体的 (領地を奪われたので取り返して欲しい、捕虜となった人を助けて欲しいなど) で、問題を解決する場所も特定されていることが多い(もちろん物語のタイプによるが)。

*Culhwch ac Olwen* の場合、アーサーの行動を支配する行動規範は *Gododdin* に見られるような名誉と主君のために命を賭して戦うことを求めるような英雄的な倫理観ではなく、O. J. Padel が *Culhwch ac Olwen* のアーサーはロビン・フッド的と評するように、どこか楽観的な民話的な雰囲気漂う。アーサーの役割は Twrch Trwyth を追う戦いの先導者であり、また争いの仲介者にもなり、

囚人の解放者としての任務もこなす実動部隊の一員である。後のアーサー王物語にみられる宮廷に留まり政で頭を悩ます静的なアーサー王とは対照的で、きわめて活動的なアーサー像である。*Culhwch ac Olwen* では *Culhwch* の要望を叶えるとアーサーに付き従った一隊は皆それぞれの国へと帰ったと物語が締めくくられている。アーサーの宮廷 *Celli Wig* が具体的な地名を表すかは不明で、アーサーの一行が活動する基点が森という語源にふさわしく、ウェールズの森という漠然とした空間である。アーサーとその一隊はあたかも架空の時を駆け巡り、空間を浮遊したのち、任務の終了と共に霧散してしまったような印象が残る。国王という呼称の欠如に加え、系図を示す父と子の名前の欠如、具体的な地名と結びつかない宮廷の設定と相俟って、ウェールズのアーサーを不可思議な時空間の存在としているといえるのではないか。

## 特別講演 Eisteddfod ～ ウェールズのナショナル・イベント

森野 和弥

### Eisteddfod: the National Event of Wales

Kazuya Morino

要旨 Abstract: The talk is inspired by the National Eisteddfod and tries to present the image of the National Eisteddfod from the viewpoint of a person who visits the festival for the first time.

Keywords: Eisteddfod, national, surprises, uniqueness

#### 1. アイステツズヴォッド「五つの不思議」

アイステツズヴォッドにまつわる「不思議」について話すことから始めましょう。最初の不思議は、私がアイステツズヴォッドの研究をやっているということです。私自身は、もともとアメリカ演劇、そして身体文化論を勉強していました。それが、10数年前に文部省（当時）の在外研究員としてウェールズに滞在することになりました。なぜウェールズか？といえ、もちろん、ここにいるパートナーのせいです。それはさておき、ウェールズの民族文化大祭アイステツズヴォッドを演劇的視点から研究しました。

第二の不思議はアイステツズヴォッドそのものの性格です。ウェールズをあげての「ナショナル」な催しなのに、実際に行ってみると農協のフェアを大きくしたようなノリなのに驚きました。アイステツズヴォッドは南北交互に開催されるのですが、会場はたいてい町の外で、駐車場は雨が降るとぬかるむため歩行用に板を渡してあったりします。野外に仮設パヴィリオンをいくつも建て、終わったら片付けてしまいます。ウェールズという「国」や「民族」を参加者